

樂友会

第30回記念
定期演奏会

慶應義塾高等学校・女子高等学校 楽友会

第30回記念 定期演奏会



ごあいさつ

身を切るような木枯らしもいつしか暖かい春風に変わり、私共楽友会は、第30回記念定期演奏会を迎えることとなりました。今宵はお忙しい中をご来場下さいまして誠にありがとうございます。

思えば高校楽友会単独での演奏会を始めて早や30年の歳月が流れました。まるでサイクルがあるかのように、少人数に悩まされる年というものにあたってしまいましたが、今年度も私達は合唱という絆を通して様々な困難を部員一丸となって乗り越え、一年を共に過ごしてまいりました。ようやく今宵こうして皆様に歌をお聴きいただけます事はこの上ない喜びでございます。

まだまだ未熟ではありますが、この演奏会において部員一人一人が、感じ考え一年間暖めてきた様々な歌への思いを皆様にお伝えし、また一人でも多くの方々の胸に残るような演奏ができる事を祈ってやみません。

最後に、常日頃からご指導いただきました諸先生方、そして今日の演奏会を迎えるにあたって御尽力下さいました諸先輩、御父兄の方々に紙面を借りて心より感謝し、厚く御礼申し上げます。

部員一同



第30回記念 定期演奏会によせて



慶應義塾高等学校長 衛 藤 駿

樂友会の樂は、音楽を略したものであります。漢字の起源からみると、音という文字は自然が發する音であり、樂の方は人間が創り出した音に由来しています。

後世、人間にとってもっとも楽しいものとして音楽が選ばれた結果、楽しいという言葉が独立を果たしたのです。樂友会は、文字通り音楽を愛好する友人たちによって成り立っています。したがって、会員相互の友情そのものが楽しい輪を拓げ、聴衆もまたその輪の中に包まれてゆくのです。

今回の定期演奏会もそのひとつであり、技(わざ)の成果はもとより、きっと樂しいつどいになることと思います。

慶應義塾女子高等学校長 青 池 慎 一

歴史と伝統を誇る樂友会の定期演奏会が、今年も開催されることは、私達にとって大きな喜びであります。特に今年は第30回記念定期演奏会ということで、心より演奏会の開催をお祝い申し上げたいと思います。

音楽を愛する気持ちが、先輩から後輩へと伝承され、発展させられてきたのであり、まことにすばらしく、意義深いことであります。本日も部員諸君の日頃の成果が發揮され、すばらしい演奏会となることと確信いたしております。

日頃から、樂友会の活動に暖かいご支援とご指導をいただいております皆様に、心よりお礼申し上げますとともに、今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

慶應義塾高等学校樂友会部長 根 垣 俊 宏

本日は演奏会においでいただき、ありがとうございます。

樂友会は昭和23年高等学校創立と共に音楽愛好会の名称で合唱団を設立し、昭和40年の「第1回定期演奏会」から今年で第30回を迎えたわけであります。このように創立以来の長い道のりには、創立から指導された岡田先生のご努力によるところが大きいのは言うまでもありません。入学と卒業を転機として部員が入れ替わりながらも、樂友会OB、OGの源流の精神と、よき伝統とが立派に受け継がれてきたことは、ひとえに諸先輩方のご協力ご支援の賜物であると申せましょう。

今回も岡田先生に指揮をとっていただくことになりましたが、そのご好意に十分報いうる出来栄えになりますことを心から祈り、ご来場のかたがたには今後いっそうのご鞭撻をお願いしまして、ご挨拶とさせていただきます。

慶應義塾女子高等学校樂友会部長 関 口 資 大

今回で樂友会の定期演奏会も30回を迎えることになりました。慶應女子高では、4月からの新年度には文化祭『十月祭』と学校誌『萌木』が、それぞれ30回と30号を迎えることになります。このことは、本校の歴史のなかで、これらの行事や刊行物が、ほぼ同じ時期に始められたことを物語っています。今から30年前の1964年は東京オリンピックの年でした。国中がオリンピックブームの中で、当時の女子高生達は自分達も、何かをしなければと熱い思いを友と語っていたことと思います。そのような中から、いろいろな行事が生まれてきたのだと思います。この定期演奏会もその一つです。今後も生徒が自主的な活動をして、その結果としてこの定期演奏会を催すことができるよう期待しています。

さて、本日はその先陣をきって岡田忠彦先生をお迎えして、30回記念演奏会が開催できることを生徒ともども喜んでおります。まだまだ未熟な演奏ですが、どうぞ最後までごゆっくりとお聞きください。

プログラム

第1部

I ステージ Te Deum

作 曲：John Rutter

指 挥：稻垣 良吾

ピアノ：野口 陽史

II ステージ 「風 紋」

作 詞：岩谷 時子

作 曲：石井 歓

第1章 風と砂丘

第2章 あなたは風

第3章 おやすみ砂丘

第4章 風紋

指 挥：稻垣 良吾

ピアノ伴奏者紹介

根垣 俊宏先生 IV ステージ

昭和 57 年、国立音楽大学教育音楽科主席卒業、岡本賞授賞。59 年、同大学大学院、音楽教育学理論的研究専攻、修士課程修了。60 年、ウィーン国立音楽大学作曲指揮科入学、教授オットマール・スヴィトナーに師事し、同年 ウィーン音楽演劇コンセルバトワール合唱指揮科入学、教授ハインツ・ランブルヒトに師事する。翌 61 年には、ウィーン音楽演劇コンセルバトワール合唱指揮科において教授ランブルヒトのアシスタントとして合唱指揮をする。62 年、ウィーン国立音楽大学作曲指揮科、ウィーン音楽演劇コンセルバトワール合唱指揮科、共に修了し帰国。留学中に O. スヴィトナーの推薦によって、フロ・アルテ管弦楽団を指揮、オーストリア国営放送局で録音し、ウィーン放送で放送される。昭和 63 年、慶應義塾高等学校に勤務、平成 3 年度より岡田先生にかわり高校楽友会部長となり、現在に至る。



III ステージ 混声合唱曲集「地平線のかなたへ」より

作詞：谷川俊太郎

作曲：木下牧子

春に

サッカーによせて

二十億光年の孤独

卒業式

ネロ—愛された小さな犬に

指揮：杉田欧里絵

ピアノ：今井加奈子

———— 休憩 ————

第2部

IV ステージ リスト「ハンガリア狂詩曲第2番」による 「ジプシイ生活」

訳詞：岡本敏明

編曲：ブルーノ・レイボルド

指揮：岡田忠彦

ピアノ：根垣俊宏

野口 陽史 Iステージ

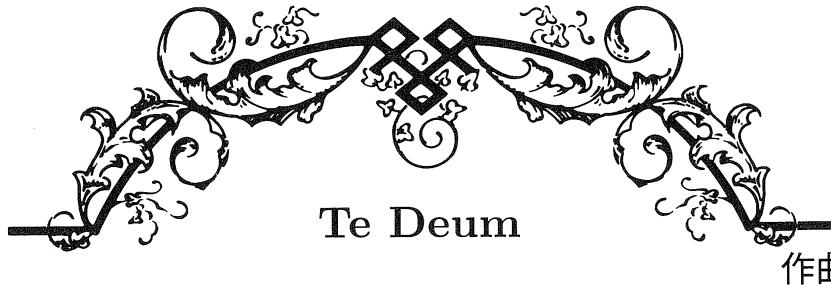
塾高3年の野口君は吹奏楽部に所属し、ピアノはもちろんのことフルート、ピッコロ、トランペットからリコーダーまでこなすという達人ぶり。彼は「音楽の楽しみ」を知り尽くしています。プラスバンドやオーケストラの伴奏も持つこの曲を、多彩な音色で細部まで見事に再現し、皆さんを魅了してくれるでしょう。合唱を支え、時に曲を飾る彼のピアノにどうぞ御期待ください。

今井加奈子 IIIステージ

今夜IIIステージのピアノ伴奏をしてくれる今井加奈子さんは女子高の2年生です。1年間フランスにいたので、フランス語はなかなかのもの。ESSに入っている彼女は、シェークスピアの劇で男の子の役をしたりしましたが、本当はとても愛らしく女の子らしいんです。体は小さくても繰り広げられる音はパワフル。というわけで歌のみならず、加奈ちゃんのピアノにもご注目(?)ください。



I ステージ



この作品は1988年10月22日に行われたイギリス国教会の総本山であるカンタベリー大聖堂の100年祭の祭典のために書かれました。我々楽友会も100年とは言わないまでも第30回の定期演奏会を迎えることとなり、その記念の演奏会の第1ステージを飾る曲として、讃美であるこの< Te Deum >は正に最適と言えるでしょう。

— Te Deum について —

< Hymnus in honorem ss. Trinitatis (至聖なる三位一体の讃美歌) >とも呼ばれるテ・デウムは、キリスト教の聖歌の1つです。本来はラテン語であるこの詩は、レメシアナ（旧ユーゴスラヴィア）の司教ニケタス Niketas の作と言われ、現存資料をたどるとその原文は5世紀にまでさかのぼります。少なくとも6世紀初頭以来、カロリング朝の< Christus vincit (キリストは打ち勝ち) >にとってかわり聖務日課において日曜と祝日の朝課の最後に歌われるようになりました。

詩は第1部と第2部の2つに大別され、第1部は讃美が、第2部は畏敬や哀願が歌われます。しかし第1部の華やかさが続く部分の性格を忘れさせるために、テ・デウムは栄光と感謝の歌とされてきました。これら詩の内容や発生の状態は、キリスト降誕の際に天軍・天使たちによって歌われたと言われる「栄光あれ」（ルカ伝2・14）から始まる大讃美歌、< Gloria (栄光の讃美歌) >に類似する点が多く見られます。ただグロリアはミサの中で歌われるのに対し、テ・デウムは典礼外でもよく歌われ、教会内では列聖の式典などで、一般には国王の戴冠式や戦争の終結などの国家的祝祭時の感謝の大讃美歌として歌われます。

イギリス国教会ではこの詩を英語訳にして取り入れ、ベネディチテ（喜びの歌の1つ）の使われないときに唱え、又非典礼的感謝礼拝にもやはり好んでテ・デウムを用います。特にここの大聖堂では、テ・デウムが立派な形式で歌われるそうです。

— 作品について —

作曲者ジョン・ラター John Rutter は現在も活躍しているイギリスの指揮・作曲家です。イギリスでは大変有名な人物で、日本にもここ数年彼の作品が入り始め各地の合唱団が演奏会やコンクールでとりあげるようになりました。

ラターは1945年9月24日、ロンドンで生まれました。頭脳明晰な彼はケンブリッジの Clare College で修士を修め(1970)、その後1975年から79年にかけて Clare College で、同時に1975年から88年まで Open Univ. でそれぞれ音楽を教えました。またその間、彼の教師であったデヴィッド・ウィルコックス David Willcocks と共に数編の合唱曲集の編纂も手掛けています (Oxford, 1970-80)。そして1981年ケンブリッジ・シンガーズを創設し、広範囲にわたるレパートリーを指揮しており、1990年にはニューヨークのカーネギーホールで行われた彼等のデビュー・コンサートも指揮を行いました。今でもラターはケンブリッジ・シンガーズと多くの優れた作品を CD に残す傍ら、作曲や講義などの活動も進めています。

彼の作品は数も多く、その特徴として「合唱の面白味」を多分に含み、接しやすいということがあげられます。代表作に< Gloria > (1974; for Orch., 1988)、< Requiem > (1985)、< Magnificat > (1990) やその他多くのアンセム（イギリス国教会で歌われる英語の宗教的テキストの詩をもつ合唱曲）がありますが、どれも宗教曲独特の雰囲気の薄いものばかりで、「思わず踊り出したくなる」などという評も見られる程です。

今回とりあげる < Te Deum > もラターらしい面白味が随所に見られる作品です。尚、本来はオルガン、もしくはプラスバンドか2管編成のオーケストラによる伴奏ですが、本日はピアノによって演奏致します。

第1部はハ長調 3/8 拍子で、速いテンポによって高らかに“主の讃美”が歌われます。ユニゾンによる華々しい出々しの後、美しい和音の流れによって次々と神への讃美を歌い上げていきます。そして厳肅な雰囲気で三位一体が歌われ、pp の響きを残して引き続き第2部に入ります。

第2部は変口長調 3/4 拍子で初めはキリストへの畏敬を込めた讃美が Maestoso によって歌われてゆきます。それは次第に“キリストへの祈り”へと変わり、ト長調を経て 4/4 拍子のハ長調へと戻ります。「O Lord (主よ)」という言葉と共に我々の祈りが歌い上げられ、最後は力強いユニゾンで締めくされます。

Te Deum

We praise thee, O God:
 we acknowledge thee to be the Lord.
All the earth doth worship thee:
 the Father everlasting.
To thee all Angels cry aloud:
 the heavens, and all the Powers therein.
To thee Cherubin and Seraphin continually do cry,
Holy, Holy,
Holy: Lord God of Sabaoth;
Heaven and earth are full of the Majesty of thy glory.
The glorious company of the Apostles praise thee.
The goodly fellowship of the Prophets praise thee.
The noble army of martyrs praise thee.
The holy Church throughout all the world doth
 acknowledge thee:
The Father of an infinite Majesty:
Thine honourable, true, and only Son;
Also the Holy Ghost, the Comforter.
Thou art the King of Glory, O Christ.
Thou art the everlasting Son of the Father.
When thou tookest upon thee to deliver man:
 thou didst not abhor the Virgin's womb.
When thou hadst overcome the sharpness of death:
 thou didst open the Kingdom of Heav'n to all believers.
Thou sittest at the right hand of God:
 in the glory of the Father.
We believe that thou shalt come to be our Judge.
We therefore pray thee,
 help thy servants whom thou hast redeemed
 with thy precious blood.
Make them to be numbered with thy Saints:
 in glory everlasting.
O Lord, save thy people and bless thine heritage.
Govern them and lift them up for ever.
Day by day we magnify thee;
And we worship thy Name: ever world without end.
Vouchsafe, O Lord, to keep us this day without sin.
O Lord, have mercy upon us, have mercy upon us.
O Lord, let thy mercy lighten upon us:
 as our trust is in thee.
O Lord, in thee have I trusted:
 let me never be confounded.

天主にまします御身を我等たたえ
主にまします御身を讃美し奉る
永遠の御父よ 全地は御身を拝みまつる
全ての天使ら
天つ御國の民 よろづ力ある者
ケルビムも セラフィムも
絶間なく声高らかに御身がほぎ歌歌いまつる
聖なるかな 聖なるかな
聖なるかな 万軍の天主
天も地も 御身の栄えと御靈威に満てりと
輝く使徒の群れ
誉めたとうべき預言者の集まり
潔き殉教者の一軍 皆もろともに御身をたたえ
全地にあまねき聖会は
ともに讃美し奉る
御身限りなき御靈威の御父を
いとたかき御身がまことの御独り子と
また慰め主なる聖靈と
御身 栄えの大君なるキリストよ
御身こそは 御父のとこしえの御子
世を救うために人とならんとて
おとめの胎をもいとわせ給わす
死のとげにうち勝ち
信する者のために天国を開き給えり
御身こそは 御父のみ栄えのうちに
天主の右に座し
裁き主として来りますと信ぜられ給う
願わくは
尊き御血もて
あがない給いし下僕らを助け給え
彼等をして諸聖人とともに
永遠の栄えのうちに数えらるるを得しめ給え
主よ 御身の民を救い 御身の世継ぎを祝し
彼等を治め 永遠に至るまで 彼等を高め給え
我等 日々 御身に謝し
世々に至るまで 御名をたたえ奉る
主よ 今日我等を譲りて 罪を犯さざらしめ給え
主よ 我等を憐れみ給え 我等を憐れみ給え
主よ 御身に依り頼みし我等に
御憐れみをたれ給え
主よ 我御身に依り頼みたり
我が望みはとこしえに空しからまじ



II ステージ

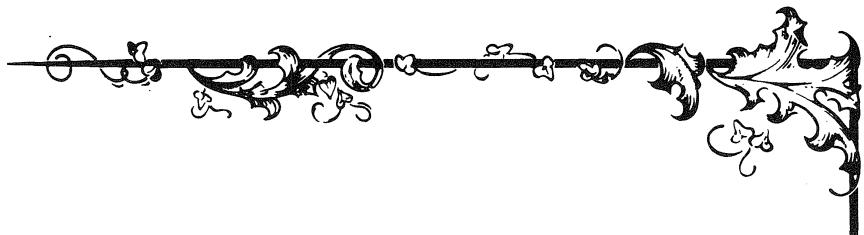


作曲/石井 敏

“風紋”とは、風によって砂丘に微妙な線で刻まれた模様のこと。白く広がる砂丘、その上を駆け巡る逞しい風、そして後に残される風紋…。この情景を、岩谷時子はあたかも愛を語り合う男女の描く世界としてとらえ、情熱的な詩で見事に表現しました。

岩谷時子は<君といつまでも>を初めとして数々のヒット作を生んだ翻訳・作詩家で、特に絶頂期の1960年代には加山雄三との共作を連発しました。彼女は「海」や「愛」を題材としたものを得意とし、加山雄三との共作もこの点で互いに通ずるものがあったと思われます。今回の<風紋>も1970年の作品ということで、詩の題材と合わせて考えても、いかにこの詩が充実しているか容易に想像がつくでしょう。

男声による「風」と女声による「砂丘」の激しくも優しい「愛の対話」が、ア・カペラで抒情的に歌われてゆきます。又随所に見られる対位的技法は、この曲の感情表現をより美しく豊かに彩ります。詞と音楽によって果てしなくふくらむ情熱と美、これらをどこまで伝えることができるでしょうか。大切に歌い上げていきたいと思います。



第1章 風と砂丘

“太陽はねぐらに 浜の子供たちは 母のふところに”

愛し合う風と砂丘が出会う闇の夜が、Andanteの流れによって広がっていくところからこの曲は始まります。しかしやがてその流れは一転し、動的で逞しい男性的な「風」が表現されます。各声部が対位的に歌うその音楽は正に一陣の風の如く押し寄せてきます。

第2章 あなたは風

本章からいよいよ風と砂丘の対話へと入ります。まず女声が快い動的なりズムで風に呼びかけていきます。それに導かれた中間部では初めに砂丘の、次にこれに答える風の語りかけとなります。

砂丘は胸の中で燃え上がる愛を歌い上げてゆきます。そう、情熱的に、激しく、そして！ ……

尚、題名が示す通りこの章は「砂丘の語り」が中心のため、所々に出てくる「風の語り」の言葉は岩谷時子の詩の中には記されていません。どうぞちらもお聴き逃しのないように。

第3章 おやすみ砂丘

砂丘の情熱的な愛の告白に、風は子守唄（ララバイ）のように流れる詞で答えます。ここではそれを女声が、第2章と打って変わった透き通るような美しさで奏でていきます。しかしそれは決して女性的な薄弱なものではなく、むしろ豊かで温かいものが含まれています。それはきっと“逞しい風のやさしさ”的な表れと言えるでしょう。

そして、最後に風と砂丘の愛の証である“風紋”が静かに歌われて、対話は終わりを迎えます。

第4章 風 紋

attacaにより第3章から引き続いて演奏される最終章は、フィナーレを飾るにふさわしい形で第1章が堂々と再現されます。やがて、砂丘と風の出会いの記憶として砂丘の上に残された“風紋”が、夜が明けていくように印象的に歌われ、曲は幕を閉じます。

風 紋

作詞/岩谷時子

第1章 風と砂丘

風が来る 風が飛ぶ 海鳴りを連れて来る
とおい空を 飛んで来る
裸の砂丘に 逢いに来る

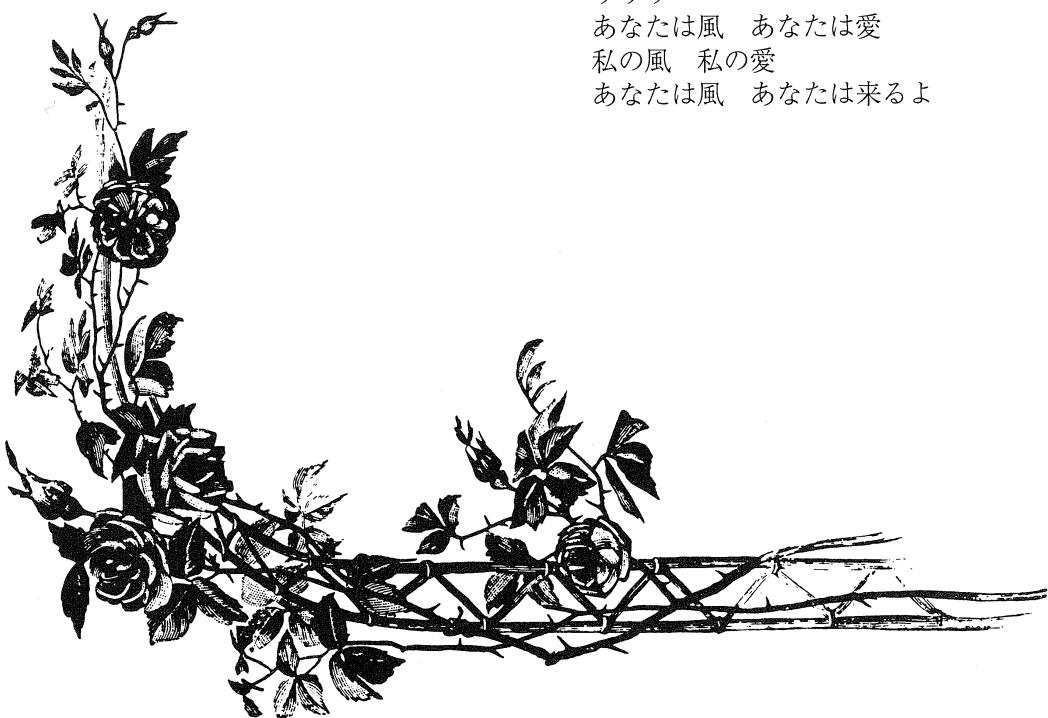
太陽はねぐらに
浜の子供たちは 母のふところに
この闇の夜 起きているのは
愛しあう 愛しあう瞳だけ

風が来る 風が吹く 風が来る
ウウウ…… アアア……
風が来る 風が吹く 風が来る 風が
風が来る 風が吹く
若い海の男のように 暗い砂丘の
暗い砂丘の上に
風が来る
風が吹く 風が来る
オオオ…… 風がとぶ……
風が夜の砂丘の上に来る
風が吹く
風が来る
風が吹く 風が来る、風が吹く、風が来る
風が来る 風が飛ぶ、海鳴りを連れて来る
とおい空を 飛んで来る
裸の砂丘に 逢いに来る
風が来る

第2章 あなたは風

あなたは風 あなたは来る
暗い海を 渡って来る
あなたは風 あなたは来る
暗い海を 渡って来る
私に 逢いたくて
暗い海を 渡って来る
あなたは風 あなたは愛
私の風 私の愛
風よ 早くここまで来て
風よ 風よ 風よ
風よ 風よ
あなたを迎える ために
風よ 風よ
あなたを迎える ために
私は のどに熱い太陽を吸うの
ウウウ……
ああ闇のなかで ああ闇のなかで
向いあう 頬のない二つの顔
風の歯は砂丘の肩を 噛みくだく
ああ闇のなかで ああ闇のなかで

あなたは風 あなたは来る
暗い海を 渡って来る
私に 逢いたくて
暗い海を 渡って来る
あなたは風 あなたは愛
私の風 私の愛
風よ 早くここまで来て
風よ 風よ 風よ
あなたは風 あなたは来る
暗い海を 渡って来る
ウウウ……
あなたは風 あなたは愛
私の風 私の愛
あなたは風 あなたは来るよ



第3章 おやすみ砂丘

おやすみ砂丘よ おやすみ砂丘よ
くちづけのあとで おやすみ
ルルル……… おねむりルルル
おねむり ルルル………
おやすみ
みずいろの朝を くちばしに
くわえて遊ぶ 鳥たちが
ここへ来ぬまに おやすみ砂丘よ
おやすみ ルルル
おやすみ 夢もみないで
おやすみ 砂丘

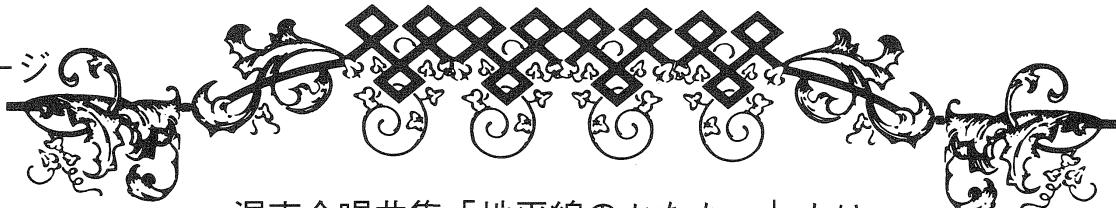
砂丘よ 夢もみないで
みじかい夜に 残る想いを
いつものように ねむったお前の
肌いちめんに 書きのこそうよ
果てもない 二人の愛よ
私たちの夜に 燃えてゆく愛をこめて
砂丘よ お前のほかは誰も読めない
愛の手紙を 書きのこそうよ
おやすみ ルルル
おねむり 夢もみないで
おやすみ 砂丘
砂丘よ 夢もみないで
風がかいた 見はてぬ夢を
風が書いた 夜明けの文字を
人は呼ぶ 風紋 風紋

第4章 風紋

風が来る 風が吹く 風が来る
ルルル……… アアア………
風が来る 風が来るルルル………
笛を吹いて 吹き鳴らして空を走る
風が来る 風が風が吹く
風が吹く 逢いに逢いに来る
ルルル……… 抱きに来る
風が来る 風が吹く 風が来る
風が来る 海を越えて来る
逢いに来る
風が来る 風が飛ぶ
風の言葉を刻む
風紋



III ステージ

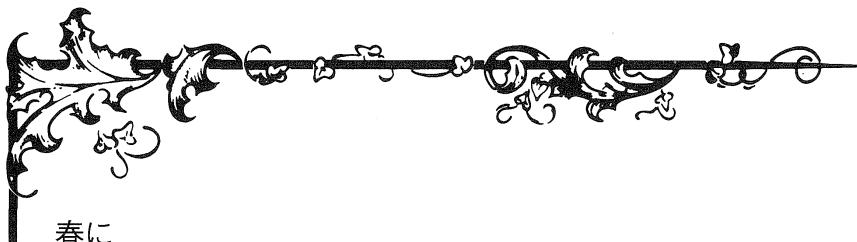


混声合唱曲集「地平線のかなたへ」より

作曲/木下牧子

この曲集は、谷川俊太郎の詩に、親しみやすいメロディーを木下牧子がつけたものです。木下牧子は、この曲集では「希望に満ちた」作品を書きました。そして谷川俊太郎の、シンプルでありながら深みのある言葉で現される希望や未来。1曲1曲違う色合いを持ったこの曲集ですが、それが一つに混ざったときに見えてくるのは、私たちがいつも身近すぎて気付かなかったものなのでしょう。

全曲ともに共通していえることは、内容が非常に分かりやすく、言葉も、普段使っているもので書かれていることです。そしてわかりやすい日本語で歌うということは、とりもなおさず、私たちの気持ちがそのまま現れるということです。どれだけそれぞれの曲の中の、「ぼく」や「きみ」を身近に感じ、自分自身として捉えていただけるか、彼らの感情をそのまま感じていただけるか、そのためにも私たちが自分を「ぼく」や「きみ」に重ね合わせて今夜は精一杯歌いたいと思います。



春に

寒さにちぢこまっていた空気が少しづつやわらぎ、辺りもやがて明るくなっていく。新たな始まりを何か予感させる春に、人々は希望を抱いたり不安を抱いたりします。「地平線のかなたへ」と思いをはせたり、歩いてゆくことにためらいを感じたり、流れるような旋律とピアノで、高まるそんな「気持ち」を表現します。

サッカーによせて

いつも楽しいこと、嬉しいことばかりではないけれど、それはきっと「泥まみれ」「汗まみれ」になって思い切ってぶつかっていくしかないです。

私たちがけり返さなければならないものは、いったい何でしょうか。

二十億光年の孤独

この詩は谷川俊太郎の処女詩集のタイトルにもなっています。

地球も、火星も、そして自分も、「膨んでゆく」宇宙の中にポッカリと浮かんだ孤独で不安な存在です。抽象的な宇宙像はかえって真実なのでしょうか。孤独の引力に引きよせられて、地球人も火星人も、知らないうちに求め合っているのです。

卒業式

誰しもが、晴れがましいような、淋しいような気持ちを感じる卒業式。自分が自分でなくなるような気がしたことはありませんか？丸めた卒業証書の向こうに新しい自分を探して「きみ」は望遠鏡をのぞくのです。

ネロ—愛された小さな犬に

この詩は谷川俊太郎が世に出るきっかけとなったもので、処女詩集の中の白眉でもあります。

ネロは谷川の隣家で飼われていた犬で、谷川家でも家族同様に愛されていました。愛した者の死を実感した18歳の谷川は、その時の自分の生を強く意識したのです。生命の活動する「夏」＝「生」。私たちは、私たちの「十八回の夏」を思い起こしながら、「新しい夏」へ歩いてゆくのです。

地平線のかなたへ

春に

この気もちはなんだろう
目に見えないエネルギーの流れが
大地からあしのうらを伝わって
ぼくの腹から胸へそうしてのどへ
声にならないさけびとなってこみあげる
この気持ちはなんだろう
枝の先のふくらんだ新芽が心をつつく
よろこびだ しかしかなしみでもある
いらだちだ しかしやすらぎがある
あこがれだ そしていかりがかくれている
心のダムにせきとめられ
よどみ渦まきせめぎあい
いまあふれようとする
この気持ちはなんだろう
あの空のあの青に手をひたしたい
まだ会ったことのないすべての人と
会ってみたい話してみたい
あしたとあさってが一度にくるといい
ぼくはもどかしい
地平線のかなたへと歩きつづけたい
そのくせこの草の上でじっとしていたい
*大声でだれかを呼びたい
そのくせひとりで黙っていたい*
この気持ちはなんだろう

作詞/谷川俊太郎

サッカーによせて

けっとばされてきたものは
けり返せばいいのだ
ける一瞬に
きみが自分にたしかめるもの
ける一瞬に
きみが誰かにゆだねるもの
それはすでに言葉ではない
泥にまみれろ
汗にまみれろ
そこにしか
憎しみが愛へと変わる奇跡はない
一瞬が歴史へとつながる奇跡はない
からだがからだとぶつかりあい
大地が空とまさりあう
そこでしか
ほんとの心は育たない
希望はいつも
泥まみれなものだ
希望はいつも
汗まみれなものだ
そのはずむ力を失わぬために
けっとばされてきたものは
力いっぱいけり返せ

*～*は作曲の際、省略した。





二十億光年の孤独

人類は小さな球の上で
眠り起きそして働き
ときどき火星に仲間を欲しがったりする

火星人は小さな球の上で
何をしてるか 僕は知らない
(或はネリリし キルルし ハララしているか)
しかしときどき地球に仲間を欲しがったりする
それはまったくたしかなことだ

万有引力とは
ひき合う孤独の力である

宇宙はひずんでいる
それ故みんなはもとめ合う

宇宙はどんどん膨んでゆく
それ故みんなは不安である

二十億光年の孤独に
僕は思わずくしゃみをした

卒業式

ひろげたままじゃ持ちにくいくから
きみはそれをまるめてしまう
まるめたままじゃつまらないから
きみはそれをのぞいてみる
小さな丸い穴のむこう
笑っているいじめっ子
知らんかおの女の子
光っている先生のはげあたま
まわっている春の太陽
そしてそれらのもっとむこう
きみは見る
星雲のようにこんとんとして
しかもまぶしいもの
教科書には決してのっていず
螢の光で照らしても
窓の雪ですかしてみても
正体をあらわさない
そのくせきみをどこまでも
いざなうもの
卒業証書の望遠鏡でのぞく
きみの未来

ネロ—愛された小さな犬に

ネロ
もうじき又夏がやってくる
お前の舌
お前の眼
お前の昼寝姿が
今はっきりと僕の前によみがえる

お前はたった二回程夏を知っただけだった
僕はもう十八回の夏を知っている
そして今僕は自分のや自分でないいろいろの夏を
思い出している
メゾンラフィット¹の夏
淀²の夏
ウイリアムスバーグ橋³の夏
オラン⁴の夏
そして僕は考える
人間はいったいもう何回位の夏を知っているのだろうと

ネロ
もうじき又夏がやってくる
しかしそれはお前のいた夏ではない
又別の夏
全く別の夏なのだ

新しい夏がやってくる
そして新しいいろいろのことを僕は知ってゆく
美しいこと みにくいこと 僕を元気づけてくれるよう
なこと 僕をかなしくするようなこと
そして僕は質問する
いったい何だろう
いったい何故だろう
いったいどうするべきなのだろうと
ネロ
お前は死んだ
誰にも知れないようにひとりで遠くへ行って
お前の声
お前の感触
お前の気持までもが
今はっきりと僕の前によみがえる

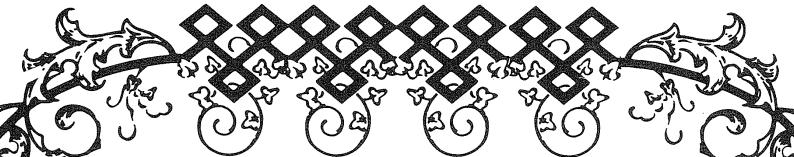
しかしネロ
もうじき又夏がやってくる
新しい無限に広い夏がやってくる
そして
ぼくはやっぱり歩いてゆくだろう
新しい夏をむかえ 秋をむかえ 冬をむかえ
春をむかえ 更に新しい夏を期待して
すべての新しいことを知るために
そして
すべての僕の質問に自ら答えるために

¹昭和13年から27年にかけ翻訳されたマルタン・デュ・ガールの長篇「チボ一家の人々」中の土地

²作詩者が昭和20年の7月に疎開した

³昭和23年に日本で評判になった米国映画「裸の町」で追いつめられた犯人が立つN.Y.の橋

⁴昭和25年に翻訳され大いに読まれたカミュの小説「ペスト」の中のアフリカの都市



リスト「ハンガリア狂詩曲第2番」による
「ジプシイ生活」

編曲/ブルーノ・レイボールド

創立46年を迎えた日吉の高等学校楽友会は、その初期、早稲田・共立・慶應の三高合同演奏会、また大学楽友会との合同定期公演から独立して1965年3月、第1回定期演奏会を催し、今年その第30回を迎え、創立以来この会の活動にたずさわってきた一人として感ひとしおです。

今宵とりあげました“ジプシイ生活”（リストのピアノ曲・ハンガリア狂詩曲第2番による合唱曲）は、私の旧制中学・音楽学校時代からの大恩師・岡本敏明先生の訳詞で、先生の指揮のもとに、この曲は東京放送合唱団（NHK）のラジオ放送により、戦後間もない頃の全国の合唱ファンの血を沸かせました。それには戦前、一世を風靡した巨匠ストコフスキによる、映画「オーケストラの少女」によりこの曲は広く知られていたこともあります。

初期の頃の楽友会でもずい分歌っていました。今年は少人数で多少不安がありますが、曲そのものもつ情熱がそれを乗りこえることを念願しつつ、リバイバルの名曲にむかいましょう。
(岡田忠彦 記)

この「ジプシイ生活」の歌詞は箱車を家として諸国を転々とし放浪する哀歎を歌ったものです。

ジプシーとは、ヨーロッパを中心として世界中に散在している少数民族です。インドを起源とするといわれるジプシーは、漂泊的生活をおくる人々として知られ、昔から「流浪の民」といわれましたが、最近では定住する人々も増えています。

15世紀初頭に初めて西ヨーロッパに現れ、全ヨーロッパへと分散した彼らは、浮浪者や盗賊などの集団と結びつけられて考えられてしまったこと、自らの罪悪のために放浪を強いられているという誤った伝説などから、地域住民による差別と迫害を常に受けました。ドイツ、フランス、イギリスなどヨーロッパ各政府による集団追放により、放浪生活を強いられたともいえます。

ジプシー音楽といった場合、ほとんど東ヨーロッパとイベリア半島に住む集団のものを指します。南スペインのフラメンコ音楽はその1つで、またハンガリーやルーマニアではバイオリン、コントラバス、ツインバロム（チター型弦鳴楽器）で構成されるジプシー・バンドが18世紀中頃にできあがり、後にはクラリネットを加えたり、弦鳴楽器を増やしたりして演奏されるようになりました。

ハンガリーの音楽好きの貴族として有名なエスティルハーゼー侯の私領管理人の子として、フランツ・リスト（1811～1886）はオーストリアとの国境が近いハンガリーのライディングに生まれました。ピアノをたしなむ父の影響もあり、彼は早くからその天分をあらわし後にはピアニスト・作曲家として不動の地位を確立します。ハンガリーの片田舎で少年期を過ごした彼が、おそらくは百姓の歌う民謡やジプシーの弾くバイオリンにより、ハンガリー独特の民謡調をしらずしらずのうちに身につけていたことも後の音楽活動に影響を与えたのでしょうか。

10歳の時に祖国を離れた彼は、28歳から始まる演奏旅行で再びハンガリーを訪れ、熱狂的な歓迎を受けました。またこの滞在期間内に再び接したハンガリー音楽への愛着もあり、故郷の旋律に基づいた音楽を書こうとしたのです。こうして書かれたのが、19曲の「ハンガリア狂詩曲」です。

ハンガリーの大部分はドナウ川によって形成された盆地です。この地方には何千年も前から人が住んでいましたが、9世紀の後半にアルパドを首長とするマジャール族というアジア人種が東から進出し、現在は人口の95%をこの民族が占めています。彼らの伝來した原始的な舞踏音楽と、ヨーロッパ文化に侵されることなく独自の文化を保持していたジプシーたちによる音楽と、この2つがハンガリー民族音楽の基礎をなしています。その音楽の中でもっとも有名であり、また同時にハンガリー音楽を代表しているものが、チャルダーシュ（Chárdás）舞曲です。この舞曲は、ハンガリー音楽特有の切分法、随所にはさまれる即興的なカデンツァなどを含み、2つの部分から構成されています。ラッサン（Lassan）と呼ばれる莊重でゆるやかな部分と、フリスカ（Friska）と呼ばれる原始的とも言えるような激しいリズムをもつ速い部分がそれです。

狂詩曲とは、自由な形式の楽曲で、しばしば民族的・物語的な要素を強く持っています。リストがハンガリー民謡を直接用いたり、あるいはそれ風なものを新たに作曲して書いた19曲の「ハンガリア狂詩曲」のうち、チャルダーシュの形式が厳格に守られているものはわずかですが、いずれもそれに近い形式はとられています。

ハンガリア狂詩曲第2番嬰ハ短調は、1847年に作曲されました。1851年に出版され、彼が親しく交わったハンガリーのテレキー侯爵に捧げられています。

第2番はラッサンとフリスカを備え、ハンガリー民族音楽の特徴がもっとも豊かなもので、10の主旋律が次々と現れます。重々しい調べの序奏の後、悲しげなアンダンテのラッサン部分に入り、莊重な旋律が奏されます。そして、ヴィヴァーチェのフリスカ部分に入り、曲はしだいに激しさを加えながら華やかさを増し、クライマックスを築き上げた後でいったん速度を落とし静けさに戻りますが、最後は華やかなコーダで締めくくられます。

ああ 見よ
故郷遠く放浪う我ら
胸に燃えたつ自由の血潮
楽し我が歌声 風にのる
ああ 我らは永遠の旅人

奇すしく妖しき 世のさだめ
定かならぬその影 捉えん
聞け奇すしきジプシイの占いを

馴れし手におどるカードよ
ああ そは禍か幸か ラララ
捉えよ追えよ幸を
かがやかに笑む幸を ラララ
奇すし占いや

喜びあふれて歌うは放浪の歌よ
歌うたえ明日の日思わず
搖ぎ行く車に 昼は歌い行き
宿り楽しや星の下
月も清き森蔭に集いて
ゆらぐ火囲む放浪の人よ

いざおどれや いざうたえや
心はずみ 歌いおどれ
うずまき もえたつ 若き心
タンボリン カスタネット空にひびき
ジプシイわれら楽し

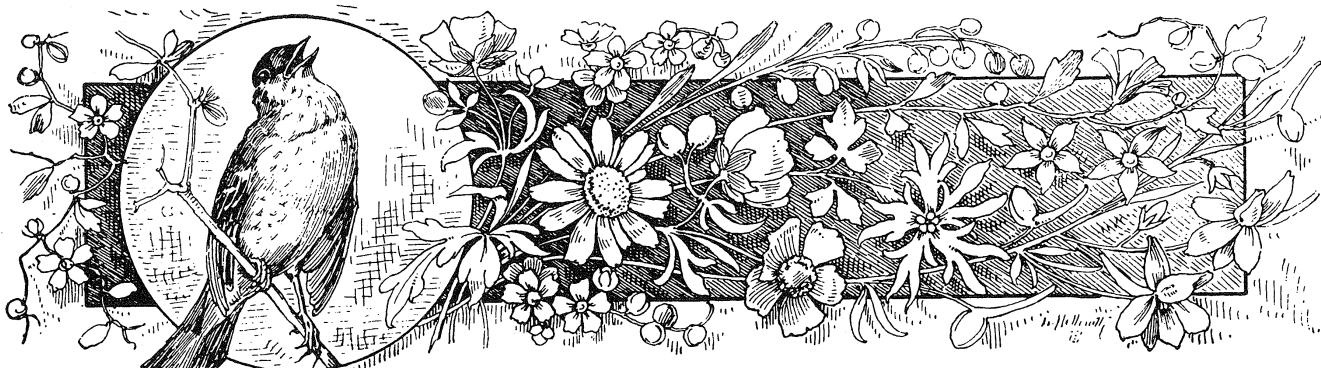
いざ来よ 早乙女おどれや
恋いしき乙女よ 捧ぐるわが歌受けよや
来たれ乙女よ
おどれや 恋いしき君よ
捧ぐるわが歌 受けよや
わがギター 君をよぶ
おどれや今宵をわれと
恋いしき君よ 捧ぐる心受けよや

星の下 集い楽しく
夜もすがら踊り明かせや
ジプシイわれら
更けわたる森にひびくよ その歌声
ハイ ほがらに
ホウ おどれや
囲む炎 もえ尽くるまで
空ほのに明るみて
梢の小鳥 眠り覚めぬ
かよい来るそよ風にまどろめ一刻を

ハイ ハイ ホー
ハイ ハイ ホー
いざ起きよ さわやかに
かがやく青空
花咲く広野は
われらにはほえむ
たどらん旅路を あああ

楽しや旅人 涙てなき自由の
よろこびあふれ 放浪う今日も
さすらい嬉しや
鳥啼く丘越え 花咲く野越え
幌馬車進む
うきたつ心に ひびきもからに
幌馬車ゆらぐ
ハイ ハイ ハイ ハイ
ハイ ハイ ハイ
空ゆく雲に 思いを馳せて
さすらいゆけば
幸は輝く はるけきゆくて

ああ楽し ラ ラ ラ
ハイ ホ 旅路
ハイ ホ たのし
笑いほがら こだまよぶ森
行く川 とぶ鳥
いざ うたえ いざ声あわせ歌う
旅人われらに この世は楽し
永遠の旅人 ララ ララ ララ ハイ

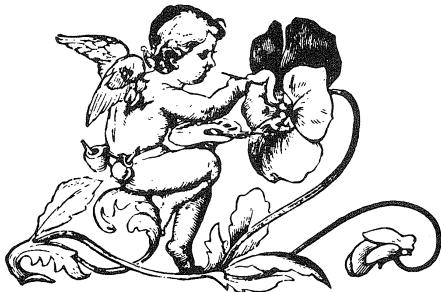


30回にあたって

岡田 忠彦先生

国立音楽大学作曲科卒業。故成田為三氏に作曲法、故尾高尚忠氏に指揮法、故岡本敏明氏に合唱法を師事。楽友会の前身「音楽愛好会」ついで慶應義塾樂友会の設立以来、多大な御尽力をいたしました。そして今回、1年ぶりにその情熱あふれる指揮で御指導いただきました。

平成3年度で慶應義塾高等学校を退職されて後、先生は悠々自適な生活を満喫していらっしゃるようです。昨年夏には久しぶりに南イタリアに御夫婦でお渡りになったということで、3年生で先生のお宅に伺った際には、何冊にもわたる大きなアルバムを皆で拝見させていただきました。また、最近は西洋美術に興味をもち始められたそうで、ご本人の談によりますと「美術資料の収集にも凝っている。」とのことです。



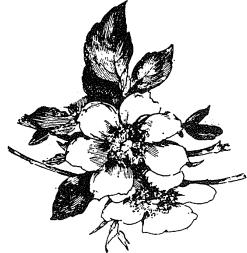
森本 哲さん（大学樂友会幹事長）

今宵、慶應義塾高等学校・女子高等学校樂友会の皆様が第30回記念定期演奏会を開催されますことを、我々団員一同心よりお慶び申し上げます。昭和39年に高校樂友会単独の第1回定期演奏会を開催して以来、1回1回積み重ね今年で30回という記念すべき演奏会を迎えるのも自分のことのように心が躍らずにはいられません。また、今年は創立者でいらっしゃられる岡田忠彦先生が久しぶりにお振りになられるということで期待で胸がいっぱいになってしまいます。最後になりましたが、今宵の演奏会の御成功と貴団の今後の益々の御発展を心よりお祈り申し上げます。



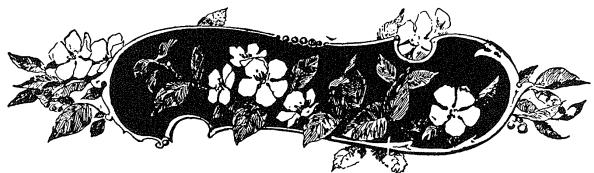
日高 好男さん（第15期 第1回定期演奏会指揮者）

第30回記念定期演奏会おめでとうございます。第1回の演奏会の学生指揮者を務めさせて頂いた私にとっては誠に感慨深いものがあります。それまでは毎年早稲田、共立それに慶應の3つの高等学校（三高と呼んでいた）の合同演奏会でした。私達が3年になると、楽友会の創立者であります岡田先生は「そろそろ単独で演奏会をしたらどうだ…」と。あれから30年。頭に白髪がめだち、皆さんのお父さん、お母さんの年齢になった私達ですが、若いエネルギーをおもいっきりぶつけた、何もかもが始めての第1回演奏会は、今でも懐かしい思い出です。そして、長い目で楽友会の将来を考えて頂いていた岡田先生に心から感謝申し上げたいと思います。



野村 豊さん（第21期 慶應義塾中等部教諭）

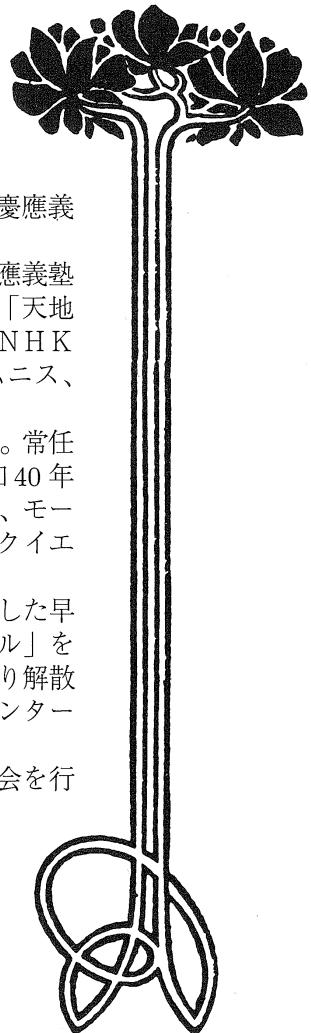
慶應義塾高等学校・女子高等学校楽友会第30回記念定期演奏会おめでとうございます。私が高校3年生の時の定期演奏会が第8回ですから、あれからもう22年になります。当時の定期演奏会は上野の東京文化会館の小ホールを使用していましたが、そのステージに立ったことがずいぶん昔のことのように思えます。高校時代は純粋なだけに考え方が硬く、メンバー同士でずいぶんぶつかり合ったものです。でも、泣いたり笑ったりしながらすごした幸せな3年間でした。当時の友人とは今も一番仲が良く、私の人生にとって欠くことのできない大切な仲間になっています。本日の演奏会が現役の皆さんにとって、すばらしい思い出のひとこまになるよう心より願い、私のお祝いの言葉とさせていただきます。



金井 信さん（第24期 ピアニスト）

第30回記念定期演奏会おめでとうございます。あれから20数年、改めて今思い起こしてみると、それまで一人でピアノをひいていた私にとってあの楽友会での3年間は、大きな意味をもつものでした。仲間と、先生方と、合唱を通して音楽を共同で創ってゆくという魅力にあれ以来ずっととりつかれた私は、現在ピアノ伴奏者兼作・編曲家として、クラシック・ポピュラー・ミュージカルの世界で活動を続けています。楽友会で体験した「水のいのち」、「旅」、「都会」、モーツアルトやシューベルトのミサなどは私の青春の宝として、又心の糧、技術の糧としてずっと生き続けています。貴団の益々の発展を祈らずにはおれません。

歩み



[昭和23年] 楽友会の前身である音楽愛好会が発足し、男声合唱を行う。設立者は元慶應義塾高等学校楽友会部長の岡田忠彦先生。

[昭和25年] 慶應義塾女子高等学校創立、それとともに女子高音楽愛好会が発足。慶應義塾高校音楽愛好会と提携し、混声合唱団として活動を始める。創立を機にハイドン「天地創造」全曲を演奏し、以後の楽友会における宗教曲演奏の礎となる。また、当時NHK交響楽団の合唱曲演奏に男声が不足していたため常時参加し、第九、ミサソレムニス、マタイ受難曲等の大曲に接し、好運な発展を続ける。

[昭和27年] 高校OBの働きで、高校・大学合同の慶應義塾楽友会が正式に結成される。常任指揮者として岡田忠彦先生を迎える、以後宗教曲を中心に定期演奏会を開くが、昭和40年に至り高校は参加を遠慮する。当時までの主な演奏曲目は、ヘンデル「メサイア」、モーツアルト「戴冠ミサ」「レクイエム」、フォーレ「レクイエム」、ケルビーニ「レクイエム」、ベートーヴェン「第九交響曲」等である。

[昭和31年] それとは別に加盟していた「私立高校音楽連盟」を脱退し、同じく脱退した早稲田高等学院グリークラブ、共立女子高等学校音楽部と共に「三高校合唱サークル」を結成し、同年10月第1回合同演奏会を開催したが、昭和39年に至り、事情により解散した。三高校合唱サークル定期演奏会における主な演奏曲目は、バッハ「教会カンタータ」、大中恩「私の動物園」、佐藤眞「旅」等である。

[昭和39年] 高校楽友会単独の第1回定期演奏会を開催。以後毎年1回の定期演奏会を行い、今日に至る。なお、第1回定期演奏会からの演奏曲目は次の通りである。

演奏曲目

第1回	ロマンスとバラードより 組曲「長崎の祭り」 その他	シューマン 森脇 憲三	第7回	混声合唱組曲「筑後川」 メンデルスゾーン合唱曲集より その他	團 伊玖磨
第2回	混声合唱のための組曲「蔵王」 佐藤 真 混声合唱組曲「水のいのち」 高田 三郎 その他		第8回	合唱幻想曲 合唱詩曲「花と愛と」 その他	ベートーヴェン 服部 克久
第3回	混声合唱のための組曲「旅」 佐藤 真 メンデルスゾーン合唱曲集より その他		第9回	混声合唱組曲「水のいのち」 ジプシーの歌 その他	高田 三郎 ブームス
第4回	カンタータ「土の歌」 中田喜直女声合唱曲集より 男声合唱組曲「四月の顔」 林 宏太郎 その他	佐藤 真	第10回	カンタータ「土の歌」 ミサ・ブレヴィス K.194 メンデルスゾーン合唱曲集より	佐藤 真 モーツアルト
第5回	合唱組曲「自然の歌」 サウンド・オブ・ミュージックより 合唱組曲「風と花粉」 大中 恩 その他	ドヴォルザーク	第11回	混声合唱のための組曲「旅」 ミサ曲第2番ト長調 組曲「都会」 合唱組曲「自然の歌」 合唱組曲「てんぐ物語」	佐藤 真 シユーベルト 中田 喜直 ドヴォルザーク
第6回	スタバト・マーテルより(女声合唱) ドイツ学生歌集(男声合唱) その他		第12回	混声合唱組曲「心の四季」 ミサ・ブレヴィス K.220 混声合唱「風紋」 「花笛」他小品4曲	高田 三郎 モーツアルト 石井 歓 大中 恩

- 第13回 混声合唱組曲「千曲川の水上を戀ふる歌」 小山 章三
 混声合唱組曲「北への回帰」 磯部 俊
 混声合唱組曲「おかあさんのばか」 中田 喜直
 フォスター歌曲集より
- 第14回 混声合唱組曲「風のうた」 大中 恩
 混声合唱組曲「筑後川」 團 伊玖磨
 合唱曲集「山の四季」 別宮 貞雄
 混声合唱組曲「からたちの花」 山田 耕作
- 第15回 混声合唱組曲「水のいのち」 高田 三郎
 混声合唱「六つのわらべ歌」 清水 僥
 混声合唱組曲「海の構図」 中田 喜直
 混声合唱組曲「日本の四季の歌」 中田 喜直
- 第16回 混声合唱「三つの無伴奏混声合唱組曲」 柴田 南雄
 混声合唱組曲「心の四季」 高田 三郎
 混声合唱「大中恩合唱曲集」 大中 恩
 Missa brevis KV.259 モーツァルト
- 第17回 混声合唱組曲「遙かなものを」 大中 恩
 作品 29 より第 3 曲「流浪の民」 シューマン
 作品 59 より「Eja mater」 ドヴォルザーク
 混声合唱曲集日本叙情歌曲集(林 光)
- 第18回 混声合唱組曲「北への回帰」 磯部 俊
 混声合唱組曲「ひたすらな道」 高田 三郎
 ポップス名曲集
 Offertorium de tempore
 <Misericordias Domini> K.222
 Requiem K.626 「Lacrimosa」
 Ave verum corpus K.618 モーツァルト
- 第19回 混声合唱組曲「水のいのち」 高田 三郎
 混声合唱組曲「大阿蘇」 團 伊玖磨
 フルツ名曲集
 コーラスアルバムより
- 第20回 混声合唱曲「三つの不思議な仕事」 池辺 晋一郎
 混声合唱組曲「北の河」 柳田 孝義
 混声合唱曲「島よ」 大中 恩
 ドイツ名曲集
- 第21回 混声合唱組曲「海の詩」 広瀬 量平
 混声合唱組曲「海鳥の詩」 広瀬 量平
 ウィンナー・ワルツ 2 大作 シュトラウス II
 スクリーン・ミュージック名曲集
- 第22回 混声合唱曲「六つの子守歌」 池辺 晋一郎
 混声合唱組曲「マザーグースの 5 つの歌」 青島 広志
 混声合唱曲集「落葉松」 小林 秀雄
 ヨーロッパ民謡名曲集
- 第23回 混声合唱組曲「水のいのち」 高田 三郎
 混声合唱組曲「ひとつの朝」 平吉 肇
 フォスター名曲集
 混声合唱組曲「旅の途の風に」 佐藤 敏直
- 第24回 混声合唱組曲「日本の四季の歌」 中田 喜直
 混声合唱のための組曲「若い合唱」 佐藤 真
 マザーグースの歌
 混声合唱組曲「ひたすらな道」 高田 三郎
- 第25回 混声合唱小曲集
 日本のうた
 ウィンナー・ワルツ名曲集
 混声合唱組曲「心の四季」 高田 三郎
- 第26回 混声合唱曲集「落葉松」 小林 秀雄
 混声合唱組曲「千曲川の水上を戀ふる歌」 小山 章三
 "South Pacific" Choral Selection
 リチャード ロジャーズ
 混声合唱組曲「幼年連祷」 新実 徳英
- 第27回 日本叙情歌曲集 (林 光)
 世界の名曲集
 Regina coeli KV276 モーツァルト
 混声合唱のための組曲「藏王」 佐藤 真
- 第28回 五つの混声合唱曲「飛行機よ」 萩 京子
 日本のうた
 Te Deum(Hob XXIIIC:2) ハイドン
 Böhmens Lied スメタナ
- 第29回 混声合唱組曲「風のうた」 大中 恩
 四つのスロヴァキア民謡 (バルトーク)
 Land of Hope and Glory
 行進曲威風堂々第一番ニ長調作品 39 の 1 より
 エルガー
 フォスターの名曲より (小林 秀雄)
 混声合唱組曲「愛のプロローグ」 高嶋 みどり





Soprano

西川 静華（3年）
草開 志帆（2年）
渋谷 里恵子（2年）
清水 悠子（1年）



ソプラノはとっても重要なパートです。なんといっても主旋律！声が高い！目立つ要素がN o. 1！でなわけでパート員の紹介をします。（うーむ、強引）

まずは本ソプラノから。2年生の志帆ちゃんは女声指揮者。文化祭ではとっても可愛い歌を見事に指揮してくれました。バナジュー（バナナジュース）が大好きな彼女の個性はこのスペースでは書ききれないで、直接お話ししてみましょう。

次はメゾソプラノ。メゾソプを語るときに忘れてはならないのが3年生の静華さん。もはや伝説となりつつある衝撃的な入部をはじめ、楽友ピアニスト、楽友調律師としての活躍など有名です。今年の文化祭では30曲近く（！）ピア伴をされました。いつも部内を明るくしてくださいます。

2年生の里恵子ちゃんは今時珍しい程つましやかで、ちょっぴり恥ずかしがり屋さんで、正に大和撫子です。つややかな黒髪が本当にうらやましい！歌声も優しく女の子らしい声です。

1年生の悠子ちゃんは色白で可愛い女の子です。彼女は文化祭の装飾などで美的センスを發揮してくれました。書道をやっているだけあって字もとてもきれいです。歌の方も本ソプを手伝ってくれたりと頑張っています。

いかがですか？我がソプラノのメンバーは？今宵は素晴らしいパート員による天使の歌声を、どうぞ心ゆくまでお楽しみください。（よく言うよ！って他のパートから抗議がきそうだわ……）



パート

Alto

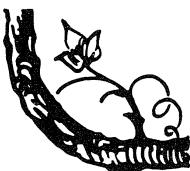
杉田 欧里絵（3年）
三浦 啓子（3年）
小畠 真琴（2年）
加藤 仁佳（2年）
大内田由紀子（1年）
中川 裕希子（1年）

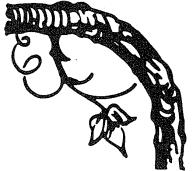


その昔は「アルトが聞こえん」に代表された我がアルトも近年は発展に発展を重ね、「アルトが恐い」とささやかれるのにもめげず、いぶし銀製の声の製造に励んだ結果、ついに「アルト抑えて」と言われないこともないパートに発育した。

まずは同名の1年生。ゆっこ・Nちゃんは茶道部を兼部しているだけに笑顔、立居振舞いはしとやか、かつ美しい。ゆきこ・Oちゃんの歌う姿特にはっきり開いたお口、上がった頬は賞賛的である。2人は何だかこちらも嬉しくなるくらい、いつもにこやかで、“楽友会の活性剤”といえよう。では2年生。OBAちゃんは文化祭を見事まとめ上げ、また責任者の貫禄のついてきたこともあって、歌だけでなく部責としての来年度も期待される。NIKAちゃん。長い髪と細いウエストがうらやましい。彼女は今年度夏合宿でも独唱会で難しそうな歌曲を歌い、根性を見せてくれた。3年生で、しめ。指揮者のORIEは隠れ帰国子女である。その才能を発揮して、Iステージの練習においては我が楽友会の発音面の未熟さをカバーしてくれた。部責のみいら。普段あまり真面目さをみせない彼女も、最後であるだけにこの定期演奏会のために奔走したようである。

アルトといえば…権力者の集まり／某1年と某2年の仲良しさんさえいればアルトは太陽のように輝いている（練習中でも）／今や（人数だけは）楽友会最大のパート／みんなチャーミングときたもんだ！→だから怖いものなしですね。嗚呼、ピアノと指揮者がお客様方と私達をへだてる……。





Tenor

中島 由彦（2年）
難波 信太郎（2年）
清水 豊（1年）
中村 陽（1年）

かつてテノール王国に、勇者カメイが猛威を奮っていた。今4人の若者が、カメイの残した秘宝「失われた声」を探しに旅だつていった。

まず、「陽ちゃん」こと中村陽。彼の美しく特徴のある高い声は、安定したテノールを形づくる。彼は真面目そうに見えますが、実はとんでもない程のひょうきん族。（もちろん、真面目でもある。）彼に笑わせられたら幸福。

次に「弟」清水豊。彼は、テナーの中で、1番音取りがはやい。人の顔を見てにやにやするところが気にくわんが、誠氏の弟ということで許してやろう。次々代の楽友会をしょってたつ逸材であり、期待も大きい。

「ナンバ」の難波信太郎。決して「ナンパ」ではない。航海士の服が好きという噂がある。何故か楽友会に唯一存在するファンクラブ「ナンクラ」をもっている。遊び人の風格を持つ男。彼の特徴ある性格は、面白いという言葉で表現できる。

「恐い」中島由彦。総務ほか、5つの仕事を持つ。テノールとベースの両方で歌う赤魔導士と遊びを究極に極めた遊び人の見習いのハーフである。何故か、下級生に恐がられているようである。

テノール王国は神経質の塊・プライド高い軍団を持っている。多分、他のパートよりも大きな声でないと、自分を許さないだろう。

お聞きあれ。

紹介



近年の楽友会内におけるベースの扱いはあまりにひどい。例えば練習中ハモらないことがあれば、指揮者が真っ先にベースが悪いと決めつけおまけに女声からは白眼視されるという有り様で、未だに我々は主旋律を歌う権利を有さない。こんな状況を打破し四声平等を実現すべく、ここに改めてベースを紹介したい。

吉田（Bs）は1年生ながら持ち前の声質で立派に本ベースをこなし、将来が期待される。但し、急に他パートの主旋律をオクターブ下で歌ってしまう“突発性オクターブ症候群”には要注意!! 山極（Bs）はその声域の広さもさることながら、ピアノの腕前もすばらしく文化祭でも大活躍。そんな彼も最近「口は禍いの門」を実戦し始め、周囲を楽しませている。高橋（Br）は新人ながらその明るさと行動力はもはや部に必要不可欠。練習前は勉強をし、休憩時間はピアノで音の確認と真面目さも見せるが、練習後は欠かさず日吉裏へ消えるところがやはりバリトン¹である。稻垣（Br）はパートリーダーに加えて指揮者も務め、今日もI・IIステージを振る。そもそも今のベースの地位の低さは彼が元凶かもしれない。一見肩書は偉そうだが、やはり彼もバリトンの端くれ、何をしているかわかったものではない。

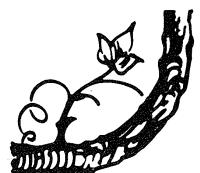
いかがであろう。このように今年のベースは、
…やはり所詮“ベース”に過ぎないようだ。

¹“遊び人”的こと



Bass

稻垣 良吾（3年）
高橋 文武（2年）
山極 徳生（1年）
吉田 幹章（1年）





楽友会この一年

3月

平成四年度定期演奏会

1993年3月18日、ここabc会館ホールにて、第29回定期演奏会が行われました。今まで一年間の、みんなの一生懸命の練習、そして努力は、この日を輝かしい素晴らしいものにするためなのです。私たちはここで、感動を味わい、そしてお客様にもまた、居眠りを忘れさせてしまうほどの感動の波がおしよせたのでした。

定期演奏会は、一年の幕を閉め、また新しい一年の幕を開けます。無事、有終の美を飾った昨年度定期演奏会も、今日という日のための新しいスタート地点であり、楽友会の長い歴史の一つの通過点なのです。

平成五年度
定期演奏会へ



4月

オリエンテーション

…塾高にて

日吉講堂の舞台から見た新入生たちは初々しくてちょっと爽やかだけれど、春の香り漂う日吉の山を群れなして歩く姿は、やはりカラスの集団のようで……その行く末を案じる女子高生たちでした。

…女子高にて

恒例、手作りクッキーは女子高生の貪欲な胃を満たすだけかと思いきや入部希望者登場!! クッキーの枚数と新人の数が比例すればいいのに……。



3月

春合宿

毎年、東京近郊で行われる春合宿。目前に迫る定期演奏会に向けて、ひたすら練習をします。起きて朝食をすませて歌い、お腹がすいて（歌う事って結構お腹がすくですよ！）昼食をしてまた歌い、夕食をすませてお風呂にはいるだけかと思いきやさらに練習……。歌の事、歌う事だけを考えていればよい日々といえるでしょう。部員達にとって、案外極楽な毎日かもしれません。それでもやはりこの頃になると、せっぱ詰まっているために皆の目は血走り、ただただ眼れぬ夜を過ごすようです。

この合宿が終われば、定期演奏会まで10日はとうに切っています。でも、あとは野となれ山となれ、なんてことは勿論ありません…よね?



6月 新入生歓迎会

新歓だー、という叫びと共に突如として新入生たちの前に疾風怒濤の如くやって来た新入生歓迎会。いったい、何が起こるのだろうか、という不安のため顔面蒼白の新入生、慈愛深き上級生とOBの方々が塾高の音楽室に集まり、ついにそれは始まった。

新入生の公式のお目見えとなる自己紹介の儀式が終わり、ひと息つくと始まったのが新歓名物、「楽友会かくし芸大会」(?)である。新入生たちの目の前で繰り広げられる上級生たちの歌、踊り、受け身、……嗚呼、その壯烈なる姿に新入生たちは目頭が熱くなるのを覚え、懸命に喝采を送るのであった……。

かくて新歓によって新入生と上級生の心は一つとなり、楽友会の核は固まるのである。



12月 クリスマス会

クリスマス会、それは単にクリスマスを祝ってみんなで楽しく騒ぐだけの会…ではありません。楽友会のクリスマス会とは奇術部とギター・アンサンブル部と一緒に川崎養護学校へ行き、我が部はクリスマソングを歌い、皆で川崎養護学校の人とゲーム等をして遊び、友好を深めるといったものです。

しかしながら、それだけではなく塾高生にとっては、今まで一線を引いて見ていた(?)2年の女子高指揮者の指揮で歌う最初の機会であり、また、短い練習時間で頑張って練習するために、部員同士の絆がいっそう強くなるかもしれません。

7月 夏合宿

夏だ!! 山だ! 川だ! 湖だ! 合宿だ!! 練習だ—っ!!! という訳で、私たち楽友会は毎年夏合宿を行う。

夏合宿は春合宿と違い、技術を向上させるのはもちろんの事、親睦を深める事にも重点がおかれる。とはいって、日程表の半分は練習時間である。まとめると、日程表の残り半分と日程表外の時間をどう使いこなすかが夏合宿を制覇するコツであろう。(おいおい!)

こうは言いながらも、ミニコン発表会¹が近いせいか(合宿は8/25~28でした)、休み時間や夜に、キーボードで音を取り直す姿には泣かせるものがある。(本当)

独唱会で自分を披露し、レクを楽しみ、親睦を深め、思いっきり練習する。これが河口湖畔での夏合宿である。

¹夏休みの最後に行われる文化祭の予行演習

10月 文化祭

日頃の成果を発揮する二大行事のうちの一つが文化祭(女子高の十月祭と塾高の日吉祭)。今年も練習と装飾に明け暮れる毎日をすごし、当日を迎えたのでした。教室の壁には我が部員の努力の結晶であり、世界有数の名(珍?)作品の一つと思われる、壁装飾とステンドグラスが美しく輝いておりました。その前に立てばいかなるアクシデントにもびくともせず、引きつる笑顔で楽しそうに歌わねばならない、という試練に耐え、私たちはより一層強くなりました。何とか歌いきったミニコンや混声・男女声合唱もお客様は喜んでください、満足のゆく出来となりました。

そんなこんなで、今年の文化祭もあつという間に思い出の1ページとなったのでした。



3年生紹介



少数精鋭を目指してがんばってきた努力を讃め讃えて、紹介させていただきます。



稻垣 良吾
バリトン

思えばこの3年間、いったいどれ程の人達と出会ったのだろう。入部を決意したのも周りに心強い先輩がいたからだった。そしてそれ以来さらに多くの人々に囲まれていった。音楽の美を諭して下さった方、時に相談にのって頂いた方。同輩とはケンカが絶えなかつたが、励まし合つたのも又その仲間たち。こんな自分もいつしか先輩と呼ばれるようになり、部員数は減少する中共に歩んでいった。そんな仲間達と歌つた歌を僕は決して忘れない。

今日のステージは、3年間自分が築きあげてきた全てをぶつける思いで臨みたい。それは客席で聴いている貴方への感謝の気持ちであり、そして今ステージにいる……

稻垣さんは、歌も指揮も共にとても素晴らしい方です。稻垣さんの歌に対する情熱は太陽よりも熱く、指揮に込められる感情は海よりも深いのです。また歌の面以外にも、責任感があり、よく何事にも気がつかれ、本当に完璧な先輩です。こんな偉大な方なのですが、実はとても人懐っこくて、陽気な方なのです。そしてとても話やすい方なので、いつもみんなの中心に立たれ、話に花を咲かせて下さいます。

こんな稻垣さんのワンダフルな歌とゴージャスな指揮に、きっとあなたも魅了されるでしょう !!



杉田欧里絵
アルト

音楽が好きではあったものの、合唱のガの字も知らずに入部して早や3年。1年の頃は細かいことも考えず、ただ楽しいだけでしたが、いつのまにか指揮台に立つことになりました。学年が上がるにつれて女声、そして混声指揮と責任を増し、どこかしら抜けている私に果たして勤まるのだろうかと両親も思っていたようです。それでも今日まで無事(?)にやってこられたのは、家族・友人・優しい先輩や後輩、そして同学年のみんなの支えがあってこそでした。書ききれないほど沢山の思い出をつくることができた3年間、その最後に、今日は指揮も歌も今までで一番いいものにしてみんなへの恩返しにできれば、と思います。

私のような者が杉田さんの紹介をするなどとても恐れ多い事と思いますので、まず最初に某OBの方に伺ってみる事にしましょう。

私「杉田さんはしっかりした方で、2年生の時にはもうパーティーリーダーも務めていらしたそうですね。」

某OB「いやあ、すごかったよ。数代前のOGを彷彿とさせたね。」

という事だそうで、杉田さんは、後輩達の面倒もよく見て下さり、普段の練習ではその熱心さでここまで引っ張って来て下さいました。今日のIIIステージでは、彼女が指揮を振る雄姿が見られることでしょう。



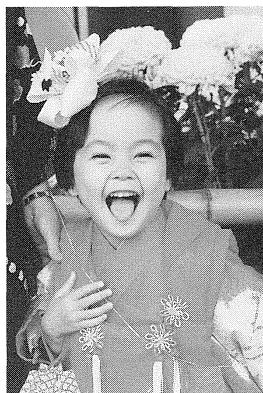
西川 静華
メゾソプラノ

早いもので、1年の文化祭から2年半経ちました。少しだけ、と思って入った教室からずっと離れられませんでした。何が何でも楽友で歌いたい！そう思って入部して定演が過ぎ、2年になりました。文化祭を作り上げました。3年になると責任が重くなり、ただ歌っているだけでは駄目だという事が分かりました。最後の文化祭では、歌の最中に泣いてしまい、OBにしかされました。歌の持つ魅力に取り付かれ、ただただ歌ってきた私ですが、ここまでやってくれた先輩方、同学年の仲間達、そして可愛い後輩達のおかげです。感謝を込めて歌います。

『—ありがとうございます—』

静華さんは文化祭を見て感動して樂友会に入り、天性の音感でもってめきめきと上達し、今や押しも押されぬソプラノのパートリーダーとして樂友会を支えていらっしゃいます。文化祭では数多くのピア伴を完璧に弾きこなし、普段は他のパートの流れをも見逃しません。そんな静華さんが最近一層輝いていると思うのは私だけでしょうか。

歌に○(○は罪悪、○は火の舞剣の舞)は不可欠だと身を持って教えてくれた静華さん、これからもお幸せに、いえ、遊びに来て下さい。



三浦 啓子
アルト

季節が移り、年と共にメンバーも移り変わる中で樂友会は、マイペースで、実にやりたいようにやってきた私にも、様々な思い出を与えてくれました。その中で歌う“楽しさ”を知り、“楽しんで”歌えたことは一番の収穫でしょう。どんな事でもまず楽しむことを念頭においた毎日は、幸せであったと言うに値するものでした。最後の舞台にも、このことを心に刻んで臨みたいものです。

今宵は後輩達による樂友会のスタート地点であるだけではなく、自分自身のスタート地点でもあります。別れはつらいですが、この3年間感じ触れてきたことを大切に、樂友会を卒業しようと思います。

みいらさんこと三浦啓子さんは部員です。その聰明な頭脳&揺らぐことのない冷静な判断で、数多くの仕事をなんなくこなし、どんな困難にも決して慌てず騒がず、落ちついたお方なのです。かといってエラそうになんかしてなくて、いつも暖かい微笑みをたたえながら、後輩達の話に耳を傾けて下さいます。しかも遊びも存分にenjoyされているとか！彼女はまさに「大人の女性」と言えましょう。

今日はぜひその歌声を味わって下さい。



楽友会部員アンケート

Q 1. あなたが楽友会に求めるることは？

- ボイストレーナー
(求む、ボイストレーナー！切実です)
- 日吉祭の自由時間
- 音と音、心と心のハーモニー
(誰？キヤッチコピーを書いたのは)
- 部員数、と安定した未来
- 愛、やさしさ
- 休息…たまには

Q 2. 今、一番欲しいものは？

- 完全防音の勉強部屋
- 色気
- 「愛の媚薬」
- 有能で忠実な部下
- 遅刻しない強い精神
- 充分な睡眠時間、48 時間な 1 日
- きれいな女子高生、かっこいい塾高生

Q 3. 練習中に一度でいいからやってみたいことは？

- 熟睡、しかも歌う
- 歌いながら、指揮者とにらめっこして勝つ！
- ノッてる指揮者に投げキッスを送る
- 全ての曲を短調にして歌う（ちょっとプロい）
- やっぱり主旋律歌いたいよう…ベース一同
(あなた方だけではありません…アルト一同)
- 男声が皆カウンターテノールになって女声合唱の練習をする
- こわくて書けない

Q 4. あなたの愛読書は？

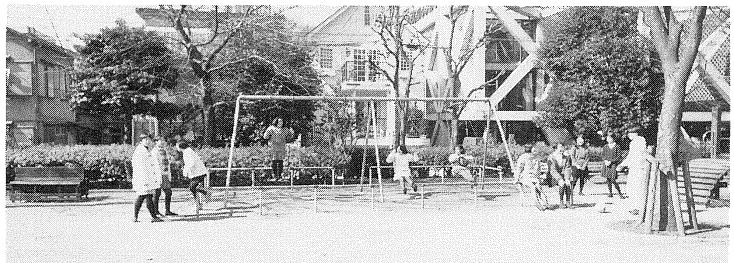
- それから
- マンガ全般 スラムダンク etc …
- 金瓶梅
- 定演パンフ
- S k i e r
- リーダーズ英和辞典 松田徳一郎監修

Q 5. あなたの理想のタイプは？

- 岡田忠彦先生（お腹ポンポンって叩いても？）
- インテリでロマンスグレーの初老の紳士
- 好きになった人（ふーんふーんふーん）
- 何でも揃ってるにこしたことはない
- ウルトラの母
- 「理想が高いから…」 by 三田の母
- ρρな人

Q 6. 10 年後のあなたを想像してください。

- バツイチ
- ちょっとイカしたナイスガイ
- …案じられる
- 友達の披露宴に未だ振り袖で現れる
- 不倫中（誰だあ？これ書いたの）
- エステでつるつる
- あつあつの新婚生活…のはず（うらやましい）
- 息子を塾高に入れ、楽友会に入るよう勧めている（もう子供がいるの！？）
- 花の 20 代を満喫して華やかに生きる



Q 7. 今まで生きてきて一番の失敗だと思うことは？

- 楽友会に入ったこと（定番）
- 自分の人間形成方法
- 剣山を踏んだ
- 高校教師 A を愛してしまったこと
- 花火をしていたら指に火がついた
- 友達に話しかけたのに、隣に誰もいなかった（……）
- 失敗は成功のもと

Q 8. あなたの一番好きな言葉は？

- 一分ごとに変わるため書けない
- ティアーモ（向上心）
- 天上天下唯我独尊（…卑！？）
- 愛は死よりも死の恐怖よりも強し
- 清廉潔白
- 初志貫徹
- 明日は明日の風が吹く（類語：どうにかなる）

Q 9. 定演に向けて一言！

- 泣きます。最初の塾歌から
- すべてをかけます！
- 精一杯歌います！
- 見ていなさい。ホール中の人が私の美声に魅了されて立ち上がりなくなるでしょう
(単に寝ちゃってるだけという噂も)
- 僕に見とれて死ぬなよ

メンバー

Soprano

西川 静華（3年）
草開 志帆（2年）
渋谷 里恵子（2年）
清水 悠子（1年）

Alto

杉田 欧里絵（3年）
三浦 啓子（3年）
小畑 真琴（2年）
加藤 仁佳（2年）
大内田由紀子（1年）
中川 裕希子（1年）

Tenor

中島 由彦（2年）
難波 信太郎（2年）
清水 豊（1年）
中村 陽（1年）

Bass

稻垣 良吾（3年）
高橋 文武（2年）
山極 徳生（1年）
吉田 幹章（1年）



編集後記

只今梅薫る頃、なのに雪がどっさり。街は埋もれてしましました。

今年度の楽友会は昨年度から引っ越ししてきた人々が約半数であったためか、何となく今までのアットホームな雰囲気が様変わりしたようです。「今年の楽友会はいつになく爽やかだ」なんて一部ではささやかれ、そうまるで部全体が早春…いや、一部は春爛漫…といった感じでした。

早く春らしくならないかな……

最後になりましたが、原稿をお寄せ下さった先生方、先輩方、貴重なお時間を割いて LATEX で編集して下さった関口先生、LATEX の dvi ファイルから高品位の版下を出力して下さった凸版印刷の平田さん、入稿を遅らせてご迷惑をおかけした国光印刷の皆さんに、深く感謝し、御礼申し上げます。

Special Thanks To:

Mr. Okada

Mr. Negaki

Mr. Sekiguchi

for your guidance

*our OB & OG worthy of respect,
especially Mr. Hattori*

Ms. Taguchi

for stage managing

and,

abc Hall's all staff

Kokkoh Printing Co., LTD

Toppan Printing Co., LTD

for making this happen.

1994年3月21日

表 紙 三浦 啓子

チケット 稲垣 良吾

杉田欧里絵

編集責任者 三浦 啓子

発行責任者 中島 由彦





1994年3月21日（祝）
於 芝公園abc会館ホール